32　和紙の里・国栖

－日本文化を支える和紙のふるさとです－

拝啓　毎日厳しい寒さが続いています。

先日は，和紙絵展にお招きいただきありがとうございました。一目見たときは油絵に見えた作品が色や手触りが異なる和紙でできているのに驚きました。和紙って素晴らしいですね。

話はまったく違いますが，私も和紙の素晴らしさを実感しました。それは本棚にあった明治時代の理科の教科書です。この本に使われている和紙は今も変色せず，しっかりしているのに，昭和 30 年代初めの学級通信の洋紙は茶色く変色し，ちょっと強く持つとパラパラとくだけるのです。そんなことから，和紙の里・国栖を訪ね，宇陀紙保有技術保持者の福西弘行さんにお話を伺ってきました。

原料は畑で栽培されている楮(コウゾ)です。1.2m の長さに切った楮を蒸し樹皮を剥ぎ取ります。これから黒い表皮を取り除いた白楮(しろそ)を 2 年間天日干ししながら貯蔵します。

吉野川の水で白楮を晒しカミソリの刃で傷の部分を取り除きます。次に草木灰汁で煮ます。このときに使われるのが，クリやカシ，クヌ

ギなどの固い木を焼いた灰です。国宝などの文化財の修復に使われる和紙を作っておられる福西さんは，文化庁の紹介で今は貴重品である木灰を手に入れておられるそうです。

灰汁を洗い流し，塵を取り除いたものは樫(カシ)の棒で叩かれます。この樫の棒には「昭和10年より使用」と書かれていました。私より1年先輩の棒です。こうしてできあがった紙素にノリウツギの樹皮と上流の川上村で採れる白土を加え，よくかき混ぜ，漉き上げの工程に入ります。冷たい水の中から漉き上げる作業を見せていただきました。漉き上げられたものは見事に一定の厚さでした。それを手際よく重ねていかれます。100枚以上の濡れた紙がきちんと重なっていました。牛乳を温めたときにできる薄皮をうまく取り上げようと一生懸命になった子どもの頃のことを思い出しました。

外には，こうして作られた和紙が松の木で作られた干し板に貼り付けられ，穏やかな冬の日差しに当てられていました。最後の工程である乾燥です。こうした昔どおりの製法で作られた和紙が正倉院御物をはじめ多くの文化財の修復に用いられるのです。

今年の春，園遊会で，「たいへんなお仕事ご苦労様です」とお声をかけてくださった天皇陛下に「妻と一生懸命にやってきました。おかげさまで長男夫婦が後を継いでくれています」とお返事されたそうです。

何もかも機械任せにしてしまう昨今ですが，素材の特性と味わいを

生かし，心を込めて，1 枚 1 枚を仕上げていく技術をいつまでも伝えていってほしい，と思った冬の 1 日でした。

秋の書道展で銀賞を受けられた静香さんとお出かけになってはいかがでしょうか。　　敬具

（やまと・平成 21 年 2 月号所載）

スポットの案内

一家 4 人で表具用裏打紙や草木染和紙の製造に取り組んでおられる福西弘行さんのお宅は，吉野町窪垣内 218-8，清流・吉野川を見下ろす高台にあります。見学を希望される場合は，ご都合を伺ってください。電話は 0746-36-6513 です。

理科のワンポイント「和紙と洋紙」

日本に和紙が伝えられたのは飛鳥時代ですが，本格的に紙が製造されるようになったのはもう少し後のことでした。和紙は繊維が非常に長いために薄くても丈夫で美しく貴重品でした。和紙はお経を写したり，戸籍を記録したりするのに使われ，今でも，正倉院には古い時代のそうしたものが残されていて，毎年開かれる正倉院展で目にすることができます。その後，日本各地で大量に生産されるようになってくると，障子やふすま，屏風，ついたてなどの家具のほか着物や寝具にも使われるようになりました。絹の着物よりも安い紙の着物はお金持ちでない人が使ったのかと言うと，決してそうではなく，丈夫で軽く持ち運びしやすいために，武士などもこれを使い，浄土真宗の開祖，親鸞聖人も愛用しておられたということです。

明治に入ると，パルプを原料とした洋紙が輸入されるようになりま

した。これに対して和紙の生産も近代化が図られます。しかし，大量生産がしにくくインクでの印刷にも不向きな和紙に代わって洋紙が多く使われるようになっていきました。和紙を使った傘も同じでコウモリ傘に取って代わられます。

しかし，和紙には和紙としての素晴らしい特長があります。また，古い文化財の修復にも欠かせません。今も，あちこちで生産が続けられているのです。

奈良に春を告げる行事として有名な東大寺二月堂のお水取りでは，練行衆(れんぎょうしゅう)と呼ばれるお坊さんが和紙を材料に仏様にお供えするツバキとナンテンを作り，紙衣(かみこ・和紙で作った着物です)を着て行を続けられます。

このお話を，華厳宗管長・第 219 世東大寺別当をお務めになっている上野道善師にお聞きしたときに，この紙衣を着せていただいたことがあります。右の写真は，そのときのもので，下はツバキの造花です。紙衣はとても紙とは思えないしっかりした触感で，ツバキは美しい色合いに染められていたことを思い出します。

天平勝宝４年(752)に始められ，今年が 1258 回目になるというこの伝統行事・お水取りも和紙に支えられているのです。